

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「あっちえ話」

このところ地球がおかしげになっているらしく、あちこちで怪しげなことが起こっています。「夏あっちえて、冬さーめ」はずの新潟も、あっちえなったり、さーめなったり、「あっちえんだか、さーめんだか、わからん天気」や、「あっちえなったり、さーめなったり」の一日で気候がくるくる変わることがあり、これを新潟弁では「あっちえさーめ天気」と称しています。

県外からきた人がこのことばを耳にすると「まさに新潟の天気！」だと思ふようです。南北に長く、日本海、河川、山脈を擁する新潟では、季節はもちろんだいによつては気候の変化が著しいため、この「あっちえさーめ」という表現は昔からあり、特異な天候は今に始まったことではなかったようです。さてこの「あっちえ」、夏場の新潟では県内あちこちで耳にすることができる、いわば新潟弁慣用句。

まず、知り合いに道で出くわしたら「あっちえね〜!」。これ一言で、暑い季節の挨拶はOKです。くどくど時候の挨拶やら、近況報告やらすることなく、相手の「ほんだ、あっちえね〜」の返答を聞いたら、「まずはや」で、立ち去ることができる便利なことばです。寡黙な越後人の一言は、何かと多忙な現代人にこそぴったりのことばといえましょう。

しかし、県内の常識は、県外人には非常識、「あっちえ」がわからず、ぼかんとあっぱん口!ということは何々あります。

知り合いのスペイン語の達人、県外人ホセ氏（仮名）は、新潟市古町で浴衣姿の某あねさまから扇子パタパタ「今日もあっちえですね〜」とにっこりいわれ、「なんでまた、突然!しかも今日も、とは!」とびっくり仰天したとか。

アッチェは、スペイン語ではアルファベットHのこと、ホセがたまげたのもうなずけます。

ところで、新潟には「あっちえ盆だ、しょっきがねえ」（暑い盆だ、元気がない）という慣用句がありますが、高温多湿な新潟の夏は、体温より高いこともあり、それこそ正気（しょっき）の沙汰ではない夏もあります。

「あっちえ」は気温以外、物事の状態にも使用します。

「あっちよて、入らんね」→「じゃ、かもせば（かきませば）、いいこて」

「猫舌らっけ、あっちよて飲まんね」→「じゃ、冷ませば、いいこて」

「こんげあっちよして、アルコール飛ぶて」→「じゃ、飲まねば、いいこて」と、お風呂の湯加減、お茶、熱燗等々日常使用頻度は高いといえましょう。

またさらに、かつての生粋の新潟もんは、新品の衣服に関しても使いました。たとえば、おニューの服で登校したA君、しょうしがりながらもうきうき気分。目ざとく見つけたB君、A君の服にちょこっと触って「うわあ、あっちえ!」というように囁き立て、次々仲間が服をちょっと触り「あちえ〜!」の合唱です。衣服が、ほとんど家が仕立て屋さんのお手製だった時代のことばです。一針一針に母親や作り手の愛情がこもった、まさに温もりのあることばは、今の使い捨てファスト衣料には似合いません。

「あっちえ夏」「あっちえお湯」「あっちえ服」…、「あっちえ」というひとつのことばから、さまざまな人々の息遣いやあっちえ思いが見えてきました。

